

立ちションと坐りション

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

先日、テレビ朝日のニュース番組で、男性が小用を足す時にはどんな格好で便器を使うかということが話題になっていました。今では、男性の30%近くが、便器に坐ってオシッコをするそうです。

それが良いことなのか悪いことなのかということで、男性ゲストと女性ゲストの間でかなりの論戦になっていましたが、実のところ、こういう問題の立て方は、あまり良い方法とは言えません。

最初から、いわゆる「立ちション」派と「坐りション」派の二つに分けてしまうのは、現実的とは言えないからです。

「立ちション」か「坐りション」かという問題設定は、どちらが好きかという好みの評価にはなりますが、実際にトイレに行った時には、「立ちション」が良い時もあれば、「坐りション」が良い時もあります。

最近の男子、とりわけ20代の若者が「坐りション」を好むからといって、それをいつでも、どこでも行っているというわけではないでしょう。公衆便所の、あの汚い便座にズボンのままで坐るのでしょうか。

彼らは、時と場所に依じて、二つのやり方を使い分けているはずです。そして、そのどちらを選ぶかという基準になるものは、清潔か不潔かという見地であることは間違いありません。

「清潔」の問題を抜きにして、二つのやり方のどちらが良いかを考えることはできないでしょう。ところが、テレビ番組に出ていた論者たちには、この大事なことがスッポリ抜け落ちていたのです。

男性陣のほとんどが「立ちション」賛成派だったのですが、その理由を問われて、彼らが口を揃えて言ったことは、それが「男らしい」からということでした。

実のところ、この答には驚かされたものです。なぜ立ってやるのが男らしくて、坐ってやるのが男らしくないのでしょうか。その辺をもっと詳しく説明してもらいたかったのですが、そこに居並んだ男性論者たちにとっては、「立ちション」イコール「男らしい」が、文句なしの絶対的な信念になっているようでした。

一人だけ、「坐りション」派の若い論者もいましたが、彼はみんなに色々やり込められ、それこそ男らしくない軟弱な男性の代表でもあるかのように、終始小さくなっていました。

もう一人、若い世代の考え方にも一理あるようなことを言っていた中年の論者もいたのですが、「それでは、あなたも坐ってやるんですか?」と問われますと、「いや、とんでもない、私は立ってやりますよ」と、慌てて打ち消していました。

「立ちション」反対派は女性に多く、奥さん方はさかんに坐ってやるようにと言うそうですが、

女房の言いなりになって便器に坐るのは男のコケンにかかわるという発言まで飛び出す始末です。

私は、男のコケンがそんなことで駄目になってしまうほどチャチなものだとは思わないのですが、なぜ立ってやるのが男としての誇りにまで結びつくのか、非常に分かりにくいところです。

そうすると、こういう人たちがどうしても坐ってやらなければならない時、小用だけでは済まない時は、いったいどうなるのでしょうか。さぞかし、惨めな落ち込んだ気持ちでやるんでしょうね。

これが男の美意識なんだと言うむきもあるかも知れませんが、しかしご存じでしょうか。中世フランスの貴婦人方は、路上で立ってやっていたんですよ。「立ちション」は何も男だけの特権ではありません。

私は、立ってやる習慣には、衣装の影響もかなり大きいのではないかと思うのです。貴婦人方の大きな末広がりスカートでは、しゃがんで用を足すことが難しかったのでしょうか。

衣服が機能的になり、合理的になり、とりわけ清潔の見地から改良されるにしたがって、この習慣も変わってきたと思います。

地面をこすりまくる長いスカートがしだいに廃れてきたのも、根本には、衣服の清潔を守ろうとする配慮があったものと思われまます。

男のズボンの前部に付いている、いわゆる「社会の窓」も、その機能性と合理性の根本には、清潔の原理があったのに違いありません。

これが無かった時代には、男たちはいったいどんな格好でやっていたのでしょうか。けっこう衣服を濡らしてしまうことも多かったのではないのでしょうか。

とにかく、「立ちション」か「坐りション」かという区別は、決して固定的なものではなく、美意識とか心理的要因で決まることでもなく、ましてや、どちらが良いとか悪いとかいう優劣の問題として考えられることでもありません。

時と場所に応じて、そのどちらの行動様式を取ってもよいということではないのでしょうか。臨機応変、立ってやろうが、坐ってやろうが、「男らしさ」を損なうものでもなければ、マナーに反するものでもありません。

ただ、その際、選択の原理となるのは、もっぱら「清潔」の見地だということを忘れてはならないと思います。

昔聞いた落語に、父親と息子が並んで「立ちション」をする話があります。父親は息子に言います。

「俺がお前の年頃には、持たないでやっても真っ直ぐ飛ばせたもんだ」

息子がそれに答えて言います。

「持っていないと天井へ行ってしまうんだ」

この話の笑いをどのように受け取るかは自由ですが、よく考えてみますと、親子ともに清潔を守ろうとしていることがよく判ります。オシッコをうまく飛ばそうということは、余計なところを汚

すまいとする清潔の原理にしたがっています。

フランスの男性用トイレには、今でも、非常に丈の高い小便器の並んでいるところがあります。そこにみんなが乗せて放水する壮観さ、「男らしさ」と、背の低い者にとってはじかに乗せねばならない「不潔」さを、同時に想像させるものでした。(『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて』ビワコ・エディション版71頁)。

この便器の形式がだんだん過去のものになりつつあるのは、やはり視覚的、触覚的な清潔の問題があるからなのでしょう。

テレビ番組に出ていた女性たちは、男性とは対照的に「立ちション」反対派が多かったのですが、その理由は、男が立ってするとハネを飛ばすので不潔だし、その跡を掃除するのが大変だからということでした。

家ではできるだけ坐ってするようにと、夫にも子供にも普段から言い聞かせているそうです。

これは、一見したところ、トイレの清潔を問題にしているようですが、必ずしもそうとばかりは言えません。彼女たちはむしろ、家事労働をする主婦の立場にたって、掃除する労力を惜しんでいるようにも見えます。

もしも、夫や子供が彼女らの言う通りに「坐りション」を励行するようになったら、もう便器や床を掃除しなくても済むということなのでしょう。

しかし、いくら「坐りション」を徹底しても、便器や床が特別キレイになるわけではなく、掃除する必要がまったくなくなるというわけではありません。といいますのも、便を流した時の飛沫がけっこう飛んでくるからです。

水しぶきが一滴も外に飛び出さないような精巧な便器は、残念ながら、今のところまだ出来てはいないようです。細かい水滴や霧状の飛沫とともに、雑菌が至る所に飛び散っていると考えてもよいでしょう。

そういうわけで、トイレの清潔を本気で求めようとするならば、「立ちション」の後であろうが、「坐りション」の後であろうが、手を抜くわけにはいきません。同等の労力をかけて、便器や床を清掃する必要があります。

女性の中には、少数派ですが、「坐りション」は「男らしくない」からイヤだと言う人もいました。これは男性の多数派と同じ意見です。恋人が一泊して帰ったあと、便座が立ったままになっているのを見て、そこに男らしさの名残を感じたそうです。(そうすると、彼女自身は、便座を立てないで流すのかな)

なかなかロマンチックな人もいるものですが、ゆめゆめ彼氏のズボンの膝などに顔を触れないでくださいよ。男らしく「立ちション」したあとには、ズボンの裾といわず膝といわず、驚くほどの水滴が飛び散っているものです。

特に、縦型の、足元まで続いている男性用小便器が曲者です。落下距離が大きいので反発力が強く、足元にピチピチ跳ね返ってきます。靴やズボンを穿いているので感じないだけです。

大小兼用の便器も負けず劣らずで、こちらは飛沫が膝はおろか顔まで飛んでくることもあります。特に、便座を上げないでするような横着な「立ちション」が危険で、標的が小さくなるため、便器を濡らすことが多くなるばかりか、自分自身もハネを受けやすくなります。

こういう便器では坐ってやることも可能ですが、いくら「坐りション」が好きな人だからといって、こんな汚れに汚れている便器や便座に腰をおろそうなどとは思わないでしょう。

「坐りション」派といえども、外では立ってやるのが普通だと思います。彼らが坐ってやるのは、家に帰り、部屋着やパジャマなどのくつろいだ姿になり、便器の清潔にも充分安心できる状態になってからではないでしょうか。

私自身、どちらかといいますと「坐りション」派の部類に入れられそうですが、それでも外出先では決して坐ってなどやりません。

家に帰ってからも、外出着のままでは決して便器に坐りません。せっかくキレイな便座カバーを付けたりして、清潔には気を配っているトイレを汚したくはないからです。

それにズボンというのは、「立ちション」向きに作られているのは明らかで、坐ってやるのは意外に難しいと言えます。「社会の窓」から出し損なえば、どこに飛んでいくか分かりません。

私が「坐りション」を始めるのは、家に帰り、風呂に入ったあとなど、最もくつろいだ状態になってからですが、その格好のほうがノンビリできますし、安楽だからということもあります。

便器や床を濡らさないでもすみますし、何よりも、自分自身の衣服にハネを飛ばす恐れがほとんど無くなるというメリットもあります。

まったくハネを飛ばさないような完ぺきな便器はありませんから、トイレの器具を扱う時、たとえば便座を上げたり、水栓を引いたりする時は、なるべく静かに、ソフトタッチで行うように努めます。

家に帰ってからのこのような行動は、一緒に生活している者、たとえば妻の清潔意識に対する信頼感や安心感がなければ取れないような自然な動きであり、家庭での男の立場を示す、より大きな「男らしさ」の表現だと言えるのではないのでしょうか。

ただ、私が、或る主婦の発言で驚かされたのは、彼女が家のルール作りに熱心なあまり、子供たちが乳離れした時から、トイレでは必ず坐るように仕付けていると言ったことでした。

そんなに完璧な「坐りション」にしてしまったら、その子たちが幼稚園へ行き、学校へ行き、外のトイレを使うようになった時、いったいどんなことになるでしょう。

やはり、何にもまして重要なのは、清潔が何かということを正しく教えることであり、時と場所に応じた清潔な行動様式を身につけさせることなのではないかと思います。

[2007/02/28 magmag]